

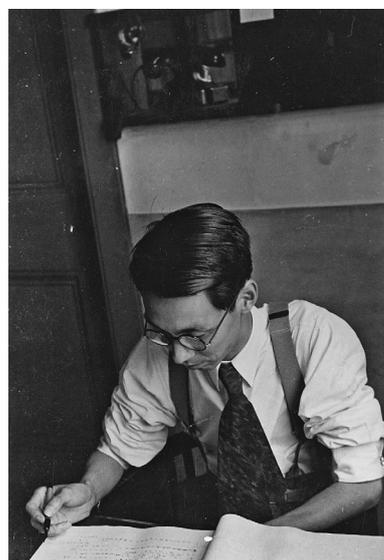


こーひーぶれいく

## 仙人掌塾

東ヶ崎 邦夫

Tohgasaki Kunio



小窓前で執務中の朝永振一郎博士  
(現・学術課)

60年近く前、大学生、浪人生等仲間5人と協力して、中学生を対象に「仙人掌(サボテン)塾」を開いた。全員素人ながら建築学科1年の学生の指揮の下、廃材と5寸釘と多少の材料を用いて、10畳ほどの寺子屋風の教室を造り上げた。ベニヤ板の壁にクロスを貼り、畳を敷くと、見かけだけは立派な部屋ができ上がった。農業高校に運動場を寄附するほどの大地主さんの許しを得て、ちょっとした空き地に建てたのだが、通学路にあたっていたこともあって、毎年数名の生徒が入塾してきたので、常時塾生は20名ほどであった。

しかし、塾の経営はずさん極まりなかった。教える側はそれぞれ得意な分野を受け持ち、生徒の側は都合の良い時に、好きな先生の授業に出席するというゆるい決まりであり、しかも月謝は好きな先生に払えば良いという何とも不思議な塾であった。

こうなると教える側も月謝を自らのものとするため、いろいろと策をめぐらすようになる。作文の指導と称して口述筆記させ賞を取らせアピールする者、前年度の期末試験問題を入手して、試験の直前に特別講習をする者までは良いとしても、英語と大学で習いたてのドイツ語をちゃんぽんで教える者、体育の授業だと言ってプロレスごっこをする者、般若心経を説く者まで出てくる始末。そんな授業の中で一番人気があったのは何といてもギター音楽授業だった。当時はベトナム反戦のメッセージを全世界に送り出していたフォークグループPP & M(ピーターポール&マリー)の曲やアントン・カラスの第三の男、もの悲しい雰囲気醸し出す「禁じられた遊び」等がギターでよく弾かれていたが、これらの曲が生徒たちの集中力を高めたのかもしれない。そのうち都内の模擬テストで成績上位者に名を連ねるかわいい女子生徒、アメリカに留学する生徒、芸大を目指す生徒も現れはじめた。

数年の時が過ぎると、教える側にも変化が生じる。就職する者、中退する者、4浪して大学に入る者等様々である。そしてこの仙人掌塾も自然消滅的に解散となった。

私は日本アイソトープ協会の前身である日本放射性同位元素協会に職を得た。協会は旧理化学研究所23号館に本部を置く。理研は日本における原子物理学の父ともいわれる仁科芳雄博士がコペンハーゲンのニールス・ボーア研究所から帰国後、宇宙線の研究を始め、サイクロトロンを建造し原子核の研究を進め、湯川秀樹、朝永振一郎博士を育てた地でもある。この旧23号館の2階に上がった正面の部屋に、昔電話機を置いた小窓があり、この傍らに私の席があった。この場所は朝永博士が大きなノートを開いて猛烈なスピードで計算し、研究に励んだ所であったという(故玉木英彦東大教授談)。協会は理研仁科研究室からアイソトープ事業部門が独立したようなものであるから、関係者の中には、自身の研究分野はもちろんのこと、英、独、仏、スペイン語その他各国の言語にも長けている方々が数多くいた。私はICRP勧告翻訳委員会等の事務方の仕事をしてしたが、関係者の醸し出す学究的雰囲気には憧れを抱いていた。

退職後、私にはできなかった夢を生徒に託すべく再び「塾」を開いた。自宅で数人を個別に見る小ぢんまりとした塾だが、生徒たちは色々だ。最近では中国人で日本語をよく話せない生徒が入ってくる。親は日本の大学で学位を取得しており、本人は英語でインターナショナルスクールの授業を受け、第2外国語としてフランス語を選択し、両親とは中国語、私とは日本語を話す。今の日本の子供たちはグローバル社会の中で、このような外国籍の子供たちとも競い合っていかなければならないのだから大変だ。

ちなみに昔教えた生徒たちのその後だが、大学でドイツ語を教えている者、芸大を出て国宝級の美術品の修復に携わっている者、医者、看護師、中小企業の社長、etc.である。驚くこともあった。ある日、末は博士が大臣かと思っていたあの成績優秀でかわいらしかった女子生徒から「新橋でバーを開店したのでいらしてください」との案内状が届いたことだ。

(元日本アイソトープ協会専任理事/さつき塾)